

カトゥルスの難読箇所について (2)

— Catull. 107. 7-8 —

大芝芳弘

前回に引き続き、カトゥルスの難読箇所のテキストと解釈上の問題について考えてみたい。今回は作品集後半のエピグラム集の中の第 107 歌、特にその 7-8 行目の読みについて検討する⁽¹⁾。

Catull. 107

Si quicquam cupido<que> optantique optigit umquam
 insperanti, hoc est gratum animo proprie.
 quare hoc est gratum † nobis quoque † carius auro,
 quod te restituis, Lesbia, mi cupido,
 restituis cupido atque insperanti, ipsa refers te 5
 nobis. o lucem candidiore nota!
 quis me uno vivit felicior, aut magis † hac est
 † optandus vita dicere quis poterit?

1 quicquam ε(γ), quoi quid Ribbeck : quid quid O, quicquid GR cupidoque Aldina
 optigit O : obtigit GR 3 nobis quoque V : nobisque hoc Statius, nobisque est Haupt,
 nobis, quod carius auro est coni. Thomson carius] carior Walker (Nisbet, Lyne)
 6 luce V : corr. B. Guarinus 7 hac est / optandus O, me est / optandus GR
 8 (post optandum in vita ...) quid Statius

もしも何事かが、熱望し念願している者に思いがけなく
 実現したなら、これこそまさしく心からの喜びだ。
 だからこれこそは、私(たち)にとっても黄金よりも大切な喜びだ、
 君が戻って来ることは、レスビア、熱望する私のもとに——、
 君が、熱望する私のもとに思いがけなくも戻り、自分から進んで 5
 帰って来る(ことは)。おお、ひときわ白い印に輝く日よ!

(1) 本稿は 2006 年 10 月 14 日に国際基督教大学で行われた第 5 回古典文献学研究会で発表する予定であったが時間の関係で割愛した部分に新たな論点を付け加えたものである。

誰か他ならぬ私よりも幸せに生きている人がいようか、あるいはこの
人生(こと)以上に念願すべきこと(人生)など、誰が語れようか?

7-8 への主な修正提案⁽²⁾

- (1) magis hac **quid** / optandum vita A. Guarinus, Thomson
 (2) magis hac **res** / optandas vita Lachmann, Goold
 (3) magis **hace** / optandam vita Ribbeck
 (4) magis hac **mi** / optandum vita Oksala
 (5) magis **esse** / optandam **vitam** Lenchantin de Gubernatis
 (6) magis **aevum** / optandum **hac** vita **ducere** quis poterit? Munro
 (7) magis **hace** / optandam **vitam** **degere** quis poterit? Baehrens
 (8) magis **umquam** / optandam **vitam** **ducere** quis poterit? Lyne
 (9) magis **ab dis** / optandum **in** vita Ellis
 (10) magis hac **rem** / optandam **in** vita Postgate
 (11) magis hac **re** / optandam **in** vita Kroll
 (12) magis hac **re** / optandum **in** vita Lee

類義語の連続と対照、反復と変化を巧みに生かしつつ、一般的な命題と個別の経験の対応を語り込んだエピグラムである。全体は「熱望し念願している」が「期待はしていない」人間にとって思いがけなく願いが叶ったらそれは「まさに心底喜ばしいことだ」という一般的な命題を、詩人個人のレスビアとの関係において語っている。1-2 *cupido*<que> *optantique* ... / *insperanti* が^s、4-5 *mi* *cupido* / ... *cupido* *atque* *insperanti* で繰り返され、また 2-3 行目での *hoc est gratum* の繰り返し、4-5 *te restituis*, ... *mi* *cupido*, / *restituis* *cupido* *atque* *insperanti* の繰り返しと 5-6 *ipsa* *refers* *te* / *nobis* への変化、さらには 3 *carius* [*vel* *carior*] *auro* の比較級に(イメージの点でも)対応する比較級を含む 6 *o* *lucem* *candidiore* *nota*! の感嘆

(2) 以下の諸提案については、各種校訂本、注釈書、翻訳書に加えて、以下の論文による：H.A.J. Munro, 'Catullus 107.7', *Journal of Philology* 9 (1880) 185; P. Oksala, *Annotationes Criticae ad Catulli Carmina*, Helsinki 1965, 98-9; R.O.M. Lyne, 'The Text of Catullus CVII', *Hermes* 113 (1985) 498-500; H. Dettmer, 'Catullus 107.7-8', *CW* 80 (1987) 371-3.

が置かれ、さらにこれらの比較級を引き継ぐようにして、最終連では 7 *quis me uno vivit felicior* という比較級を伴う修辞疑問文で自分は誰よりも幸福だと捉える趣旨が、続く *aut* の後では今度は *magis ...* という比較級を含む同じ修辞疑問文 8 *dicere quis poterit?* に置き換えられて締め括られている。

難点は実は 1 行目と 3 行目にもあるのだが、本稿では特に 7-8 行目の問題に焦点を絞って論ずることにしたい。写本の読みがそのままでは成り立ち得ないことは明白で、何らかの修正が必要である。ではどのような修正が妥当か。

従来の修正は大きく分けて二通りに区分できるように思われる。つまり、*magis ... / optandus (-um, -am, -as)* の比較の対象を (明示的か否かはともかく) 「人生」全体に拡大して語るか、それとも 8 *in vita* 「人生において」という読みを採り、「念願すべきこと」を「ある出来事」に限定して語るのか、ということではないか。(1)–(8) は前者、(9)–(12) が後者に当たる。前者のうち、「この人生」を明示的に比較の対象とする読みは (1) (2) (3) (4) (6) (7) だが、(5) (8) もそれを言外に前提にしている。そしてこれらの内で、「人生」そのものを「念願すべきもの」と読む読みは (3) (5) (7) (8) であり、(6) *aevum* も同趣旨であるが、他方、何らかの「事柄・出来事」とする読みは (1) *quid optandum*, (2) *res optandas*, (4) *optandum* である。これに対して、後者の場合には「人生」は比較の対象ではなく「人生において」という形で言及され、比較の対象は (10) (11) (12) が明示的に「このこと (*hac [re]*)」と語られ、また (9) は *ab dis optandum* という独特の読みを採るものの言外に同様の比較対象を想定していると考えられるので、「より念願すべきこと」も何らかの「出来事・事柄」に限定されることになる。つまり、(9) *optandum*, (10) *rem optandam*, (11) [*rem*] *optandam*, (12) *optandum* である。なお、(6) (8) では動詞を *dicere* から *ducere* に、(7) では *degere* に読み替えて、「より願わしい人生を送る (ことが誰にできようか)」という読みを提示している点で他の修正読みとは異なる⁽³⁾。

以上をまとめてみると、次のようになろう。

(3) 以上の他に *Riese* は *magis hac re / optandam vitam* と読むが、これは「出来事・事柄」を比較の対象として「念願すべきもの」を「人生」とする点で他のどの提案とも異なり、内容的にも考えにくい提案である。また *D. A. Slater*, 'Catullus CVII', *CR* 38 (1924) 150-1 は 6 行と 8 行の大部分を入れ替え、7 行目末の写本の読みは本来 *aut magis hac me est* だったがそれは *haut magis Acme est* の誤写だったとした上で、次のように読む: 5-8 ... *ipsa refers te / nobis; 'invitamus' dicere quis poterit? / quis me uno vivit felicior? haut magis Acme est / optanda. o lucem candidiore nota!*

(A) 比較の対象は「人生」：(1), (2), (3), (4), [(5)]; (6), (7), [(8)]

「より念願すべきもの」も「人生」：(3), (5); (6) *aevum*, (7), (8)

「より念願すべきもの」は何らかの「事柄・出来事」：

(1) *quid optandum*, (2) *res optandas*, (4) *optandum*

(B) *in vita* と読み、比較の対象は「このこと (*hac [re]*)」：[(9)], (10), (11), (12)

「より念願すべきもの」も何らかの「事柄・出来事」：

(9) *optandum*, (10) *rem optandam*, (11) [*rem*] *optandum*, (12) *optandum*

なお、(A) は「この人生」と比較して「より念願すべき人生」あるいは「より念願すべき事柄」を「語る」とするか ((1)–(5))、「より念願すべき人生を」「送る」と修正する ((6)–(8)) のに対して、(B) は「この人生において」「このことよりも」「より念願すべき事柄」を「語る」とする点で共通している。

さて、これらの諸提案のうち、どの方向性が最も妥当と言えるだろうか。考慮すべきことは恐らく、2つの点に絞られるだろう。〔1〕問題の詩句は冒頭の *optanti* に対応すると見られる *optandus* の語を含む以上、第1行の趣旨との呼応関係を考慮する必要がある。〔2〕この最後の修辞疑問文が直前の「誰が私以上に幸福に生きているか (= 私以上に幸福な人は誰もいない)」という言葉とどう関連するのかを考慮し、その趣旨に適合する読みが修復される必要がある。しかし、*quis ... vivit felicior* 「誰が幸福に生きているか」に対して、*dicere quis poterit* 「誰が語れるだろうか (= 語れる人が誰かいるだろうか)」は少なくとも表現の上では必ずしもうまく適合するようには見えない。「幸福に生きている (= 幸せな) 人」と何事かを「語れる (論評できる) 人」の間に齟齬があるように感じられるからである。その食い違いを容認可能なものと見るか、テキストの問題のために生じた難点なのかも考える必要がある。このことは、*quis ... vivit felicior* という言葉を一時的な喜びの表現と見るか、「人生」そのものを幸福と感ずるほどに誇張した言葉と見るかによっても違いが生ずるように思われる。(1)–(5), (9)–(12) の修正提案は、「幸せな人」と「語れる人」の相違にはあまりこだわらず、伝承のテキストから可能な修正を施そうとしている。しかし、*dicere* を (6) (8) のように *ducere* に読み替えたり、(7) のように *degere* に修正する提案はこの齟齬を重視してそれを是正しようとするものと思われる。特に (8) の Lyne は、*vivit felicior* の現在と *quis poterit* の未来の対比を重視し、*umquam / ... ducere quis poterit?* 「誰がこれから先もより念願すべき人生を送れるだろうか」と読むことを提案したものである。従って、これらの論点を上述の二通りの区

分と連動させて考えれば、問題は結局、*magis ... / optandus* 「より念願すべき」と言われるのは「人生」全体に拡大して語られているのか、ある一時的な「出来事・事柄」に限定されるべきことなのか、どちらが妥当か、ということになろう。

そこで、このエピグラムの内部の統一性という観点に立ち、上で問題〔1〕として挙げた冒頭の *optanti* と *optandus* の対応関係を重視するならば、*optanti* 「念願」の対象は何らかの「事柄 (*si quicquam ...*)」であり、その後の 2-3 *hoc est gratum* の繰り返しや 4 *quod* 節もある「出来事」を問題にしているのだから、「より念願すべきこと」も何らかの「事柄・出来事」である方が妥当であるように思われる。その見方からすると、上述の (1) (2) (4) や、*in vita* と読んで「事柄」を読みとる (9)―(12) の読みが良さそうに見えるが、ところがこれらの場合にもやはり *dicere quis poterit?* 「誰が語りうるか」という締め括りは、直前の「誰が私以上に幸福に生きているか」との食い違いが大きいように思われる。従来の修正読みではこの点が違和感として残る。そこで、この観点から敢えて修正を施すならば、例えば

(13) *magis hac re / optandum in vita discere quis poterit?*

あるいは

(13') *magis hac rem / optandam in vita discere quis poterit?*

「人生においてこのこと以上に念願すべきことを誰が知ることができようか。」と読めるのではないか。この場合、*discere* = *experiri* 「経験から知る・学ぶ」であり⁽⁴⁾、従って「より念願すべき事柄」を「誰が経験できるだろうか」ということになるので、直前の *quis me uno vivit felicior* 「(現に今) 誰が私より幸福に生きているか」と並列に並べても「誰が語れるか」よりもズレは小さくなるであろう。つまりこの場合、*vivit felicior* は「人生」全体について言うのではなく、いわば現在進行形的な意味であって⁽⁵⁾、要するに「この出来事のおかげで私は今幸福だ」の意と考えられるので、*discere* と読めば「この私の経験以上に念願すべき (= 幸せな) 経験が誰にできようか」となり、7-8 行目の 2 つの修辭疑問文には実質的にはほとんど隔たりはなくなるように思われる。また、*discere* と読むならば、この詩句は第 1 行目の *quicquam ... optanti ... optigit* 「念願している人に何かが起こる (叶う、実現する)」が、出来事を主語にして述べたのに対して、その出来

(4) Cf. *TLL*, s.v. *disco*, 1335.15ff. そこにも引かれているように、*Catull.* 21.11 *me met puer et sitire discet* はこの用法の一例と考えられる。

(5) *Lenchantin de Gubernatis ad loc.* は *vivit* = *est* だと説明し、*Catull.* 8.10, 10.33, 111.1 を挙げている。

事を経験する人間の側から語った表現だということになるだろう。

このエピグラム自体の内的整合性を中心に考えるならば、このような読みが考慮できると思われるが、他方で、*vivit felicior* を詩人自身の高揚した気持ちを語る誇張表現として理解するならば、詩人がレスビアとの思いがけない和解と再会によって、人生そのものをも幸福と思うような気持ちを語っていると見る見方も捨てがたい。そして事実、そのような理解を促す根拠がある。すなわち第 68 歌の末尾には、この第 107 歌と照応するとと思われる詩句が見出される。

Catull. 68. 143-60

nec tamen illa mihi dextra deducta paterna
 fragrantem Assyrio venit odore domum,
 sed furtiva dedit muta munuscula nocte, 145
 ipsius ex ipso dempta viri gremio.
 quare illud satis est, si nobis is datur unis,
quem lapide illa diem candidiore notat.
 hoc tibi, quod potui, confectum carmine munus
 pro multis, Alli, redditur officiis, 150
 ne vestrum scabra tangat robigine nomen
 haec atque illa dies atque alia atque alia.
 huc addent divi quam plurima, quae Themis olim
 antiquis solitast munera ferre piis.
sitis felices et tu simul et tua vita, 155
 et domus ipsa, in qua lusimus, et domina,
 et qui principio nobis † terram dedit aufert †,
 a quo sunt primo mi omnia nata bono,
 et longe ante omnes, mihi quae me carior ipso est,
 lux mea, qua viva vivere dulce mihi est. 160

ここには明らかに 107 歌の幾つかの詩句と共通する発想や表現が見出される。つまり、レスビアが浮気相手である詩人のもとに時折やってきてくれれば詩人は満足であって、そのような幸福をもたらしてくれる彼女が生きている限り詩人にとって人生は喜びだ、という状況と、この 107 歌で歌われている状況は明らかに対応する。語句の点でも、147 nobis ... unis (~107. 7 me uno), 147-8 is ...

/ quem lapide illa dies candidiore notat (cf. 160 lux mea) (~6 o lucem candidiore nota!), 154 sitis felices (~7 vivit felicior), 159 mihi quae me carior ipso est (~†nobis quoque† carius [vel carior] auro), 160 qua viva vivere dulce mihi est (~7-8 vivit felicior, ... †hac est / optandus vita†)などの表現は明らかに類似している(下線部、特に太字部分)⁽⁶⁾。もちろん、第68歌と107歌では詩の形式も違えば調子にも相違が見られる。68歌では第三者である友人への感謝を込めた語りかけの中でレスビアとの関係を比較的冷静に語っているが、107歌では「思いがけない念願の成就」によって誰よりも幸福を感じるといふほどに高揚した気持ちが語られている。しかし、特に68歌末尾の160 lux mea, qua viva vivere dulce mihi est と 107.7 quis me uno vivit felicior がともにやや誇張された表現と内容において対応していることを考えあわせれば、問題の箇所でも詩人がやはりその「より念願すべきこと」を「人生」全体にまで拡張して語っていると見ることも可能に思われる。しかし、ここでもやはり、dicere quis poterit? が抱えるズレが問題になる。しかしながら、(6) (7) (8) のように ducere や degere を導入した修正が必ずしも必須とは限らない。というのは、一つの可能性として例えば、次のように読むこともできると思われるからである。

(14) magis **hac mi** / optandam **vita** dicere quis poterit?

「私にとってこの人生以上に念願すべき人生を誰が(私に)語ることができようか。」

このように読めば、問題にされているのはあくまで詩人にとって「より念願すべき」人生であって、「誰が詩人自身より幸福に生きているか」という問いと「詩人にとってより念願すべき人生」を「誰が語りうるか」という問いとの間には隔たりはほとんどなくなるのではないか。写本の伝える hac est と me est という異読から見ても hac と mi の両方が伝承上両立しうる読みだった可能性があり、しかもこの文脈において mi 「私にとって」という「私」の強調は直前の me uno を受け継ぎ、また先ほども引いた 68.160 lux **mea**, qua viva vivere dulce **mihi est** とも対応するものとして意味がある。また、mi はこの場合 dicere の間接目的語と

(6) ちなみに、68.159 mihi quae me carior ipso est の表現は、107.3 を nobis quoque, carior auro / quod te restituis (Walker [Nisbet, Lyne]) と読む根拠の一つとなる。この読みによって Lesbia はこの詩でも相応しい形容を与えられることになり、この後の o lucem candidiore nota! という言葉がやはり 68.148 quem lapide illa diem candidiore notat に対応することと並行的な呼応関係が成り立つのと同時に、107.3 nobis quoque という伝承通りのテキストも妥当な読みと認められるからである。

しても機能しうる語であり、その点からも「誰が語りうるか」という修辞疑問文の趣旨は要するに詩人にとって「より念願すべき人生」を誰も彼に対して語れはしない、詩人にとってこの人生が最も幸福な人生であることに異論の余地はない、ということであろう。従って「誰が私よりも幸福か(=私以上に幸福な人はいない)」に続いて、「私にとってより念願すべき人生を誰が語れるか(=私にとってこれ以上念願すべき人生はない)」という形で、ほぼ同一の趣旨を異なる表現で述べたにすぎないことになる。すでに(4) Oksala によって *magis hac mi / optandum vita* という提案がなされているが、「この人生」と比較されるべきは特定の「事柄」を指す中性の *optandum* よりもむしろ人生そのものとする方が妥当であろうし、上述のように念願すべきことを「人生」全体にまで拡張している文脈からして *optandam* と読むべきかと思われる。いずれにせよ、この連関においては *mi* は不可欠の一語であると考えられる。

* * *

だが、これまで見てきた修正提案はいずれも写本が伝える *hac est / optandus* または *me est / optandus* という読み、特に7行目末尾の *est* の存在にほとんど注意を払ってこなかった。構文上あり得ない語として無視されるか本来の読みから生じた誤記と見なされたのであろう。だが、仮にこの写本伝承が何らから真正の読みを伝えるものだとすればどうであろうか。もしもこの文脈で *est* が成り立ちうるとすれば、文の途中に挿入句的な詩句が入って来ている場合であろう。そのような詩句の存在を想定したとき、8行目後半の *dicere quis poterit?* の表現は *dicere* によって直接語法を導入した詩句だという可能性が考えられないだろうか。その場合、直接語法の引用はどこから始まると考えるべきだろうか。結論から言えば、(a) *magis* から始まる場合と、(b) *hac* から始まる場合があるように思われる。

そこでまず、(a) *magis* から始まる場合を考えてみたい。上述のいくつかの修正案に準じて考えれば *hac ... vita* を比較の対象と取るか、*hac ... in vita* と読むかによって、次のような可能性があるのではないか。まず

(15) “*magis hac est / optandum vita*” *dicere quis poterit?*

「『この人生以上に念願すべきことがある』と誰が語れるだろうか？」

または

(16) “*magis hac est / optandum in vita*” *dicere quis poterit?*

「『この人生には(それ)よりいっそう念願すべきことがある』と誰が語れるだろうか?」

さらに、上で示唆したように伝承の *me* が本来は *mi* だったとすれば、これらの読みの *hac* の後に *mi* を挿入する可能性も考えられよう。即ち、

(15') **“magis hac mi est / optandum vita”** dicere quis poterit?

「『私にはこの人生以上に念願すべきことがある』と誰が語れるだろうか?」

または

(16') **“magis hac mi est / optandum in vita”** dicere quis poterit?

「『私にはこの人生において(それ)よりいっそう念願すべきことがある』と誰が語れるだろうか?」

と読むのである。

これらの読みでは *magis ... optandum* と *hac ... (in) vita* という 2 つの *hyperbaton* が組み合わされた中央に当たる *hexameter* の行末に、やや異例な単音節語 *est* が配置されて「存在」を強調する言葉として用いられていると考えられる⁽⁷⁾。意味としては、(15) (15') は「この人生」即ち詩人の人生以上に念願すべきことがある、と言える人など誰もいない、つまり、詩人の今の人生こそが最も念願すべき、幸福な人生だと誰もが認める、ということになり、直前の「誰が私以上に幸福か」に続く自然な文脈を作ると言えよう。また、(16) (16') では「この人生」

(7) 類似した構成の詩句としては、cf. Hor. Serm. 2.6.115-6 *tum rusticus: 'haud mihi vita / est opus hac' ait*. この例では *haud mihi ... opus* と *vita ... hac* の中央に当たる(行末以上に強調的な)行の冒頭に *est* が配置されている(直接話法の引用であるのは単なる偶然の一致か)。「存在」を意味する *sum* の用法のカトゥッルスにおける例としては、e.g. 3.2 *et quantum est hominum venustiore*; 86.4 *nulla in tam magno est corpore mica salis* など。行末の単音節語という特殊なリズムによってその意味が強調されていると思われる例としては、cf. e.g. Cic. Arat. fr. VII 4 Baehr. *sed nautis usus in hac est*; Hor. Serm. 1.2.84 *siquid honesti est*; 2.3.6 *nil est* (cf. 1.5.87 *quod versu dicere non est*); Epist. 1.11.29 *quod petis hic est*; etc. 一般に行末の単音節語の効果については、E. Norden, *Vergilius Aeneis Buch VI*, ad 346, 466, Anhang IX, 438ff., 448f.; R. G. Austin (*P. Vergili Maronis Aeneidos Liber primus, quartus, sextus*) ad 4.132, 1.105, 6.346. なお、従来の提案のうちでは (5) *aut magis esse / optandam vitam* が「存在」の意を間接話法で表現した読みだと言えよう。また、最近になって A. J. D'Angour, 'Catullus 107: A Callimachean Reading', *CQ* 50 (2000) 615-8 は 7 行目末に *hypermetric elision* を想定して *aut magis hac esse / optandam vitam* と読むことを提案し、さらにそれを受けて J. L. Butrica, 'Catullus 107.7-8', *CQ* 52 (2002) 608-9 は *aut magi' nostra / vitam esse optandam* を提案しているが、これらの読みでも明らかに *esse* は「存在」の意味を強調した語である。

とは一般的にこの世の人間の生を指し、およそ人生において詩人が経験したこと以上に念願すべき(何か別の)ことがある、と言える人などいない、という趣旨だと理解できよう。つまり、詩人の経験こそが人生で最も念願すべきことだ、という意味になり、直前の「詩人こそが最も幸福だ」に続いて、その幸福の源泉となった経験こそが何よりも願わしい経験であることを強調することで、やはり整合的な文脈を作り出していると考えられる。従って、これらのいずれの読みにおいても、従来の修正読みのうちでは(1)(2)(4)や(10)(11)(12)が目指したのと同様の意味合いが、ただ *optandus* を *optandum* (in) に(あるいはさらに *me* を *mi* に)変更するだけで、ほぼ写本伝承のままで表現されていたことになる。のみならず、先に問題にしたような「誰が活着ているか」と「誰が語れるか」の間に何らズレが生じることなく、十分に整合的に理解できる点が重要である。

だが、果たして、このように唐突に直接話法が導入されるような場合があり得るだろうか。それに対しては、次のような諸点を考慮すべきであろう。

[1] *dicere* のような言説動詞が引用の前ではなく、引用の後(あるいは中間)に置かれる例は珍しくない⁽⁸⁾。従って、ある程度引用が進んでから、それが引用だったと気づく例も少なくない。直接話法の引用が唐突に文の途中にその不可欠の構成要素とし導入され、少し先まで進まないとなれば発話の引用だとは気づかれにくいような例は、古代のように *punctuation* の記号の未発達な筆記法であるにも拘わらず、必ずしも珍しくない。例えば、キケローの弁論などの中にもそうした直接話法の引用の例が時折ある：e.g. *Phil.* 1.34 *Quod videmus etiam in fabula illi ipsi qui 'oderint, dum metuant' dixerit perniciosum fuisse* (cf. *de off.* 1.97). *カトウツルス* にも 10.13 *'at certe tamen' inquit, 'quod illic / ...'*; 24.7 *'qui? non est homo bellus' inquit. est; 45.1ff. suos amores / tenens in gremio 'mea' inquit 'Acme, ...'*, 12 *'sic' inquit 'mea vita Septimile'*; 55.12 *'en hic in roseis latet papillis'* などの例がある。また例えば、*Hor. Serm.* 1.4.134 *'rectius hoc est ...'* が直接話法であることは、少なくとも次行の *hoc faciens vivam melius* まで聞かないと推測できないだろうし、はっきりとそう確認できるのは引用の後の 137f. *haec ego mecum / compressis agito labris* と語られた時点であろう。Ibid. 2.3.281ff. *Libertinus erat, qui circum compita siccus / ... currebat et 'unum' / ('quid tam magnum?' addens), 'unum me surpite morti! / dis etenim facile est' orabat, ...* のような複雑な例も見出される。ちなみに、

(8) *dicere* が直接話法を導入する例は *OLD* s.v. 2; *TLL* s.v. *dico*, 982.33ff. 発話動詞としての *dico* が、直接話法が導入された後に現れる場合については、*ibid.* 982.68ff.、引用の中間に置かれる場合については、*ibid.* 983.11ff.

特にオウィディウスには直接話法を詩句のうちに挟み込む形で効果的に用いる例が少なからず見出される：e.g. Am. 2.5.9-10 *felix, ... / cui sua 'non feci' dicere amica potest*; 2.9.25-6 *'Vive' deus 'posito' si quis mihi dicat 'amore', / deprecet*; 2.18.5ff. *saepe meae 'tandem' dixi 'discede' puellae: / ... / saepe 'pudet' dixi: ...*; 3.1.15 *et prior 'ecquis erit' dixit 'tibi finis amandi, / o argumenti lente poeta tui? / ...'*; Epist. 12.136 *ausus es 'Ausonia' dicere 'cede domo!'*; 204 *dos mea: 'Quam' dicam si tibi 'redde', neges*; 17.164 *nil illi potui dicere praeter 'erit'!*; Fast. 4.235 *et modo 'tolle faces', 'remove' modo 'verbera' clamat.*⁽⁹⁾ このように詩人たちは、むろん何らかの効果を意図してであろうが、直接話法の引用をかなり自由自在に(時には複雑に組み合わせてまで)用いることができたようである。従って、直接話法の始まりがその時点で構文上明確に理解できなくとも、発話の引用が差し挟まれていたことが後から了解されるような場合も十分あり得ると考えられる。カトゥッルススのこの一節について言えば、選言的小辞の直後から直接話法の引用で始まる修辭疑問文が始まることになり、2つの同種の疑問文が *aut* を挟んで結ばれる形になるので、構文的には必ずしも了解し難いとは言えないであろう。

[2] この点を考えるとき、エピグラムの伝統の中にもこうした直接話法が活用される場合が多いことに留意すべきであろう。例えば『ギリシア詞華集』に収められたエピグラムには、しばしば直接話法が用いられ、しかも特に詩の締め括りに、ある人物の発話の引用が置かれる例が少なくない。つまり、直接話法がエピグラムの結末をつける役割を与えられている場合は珍しくないのである⁽¹⁰⁾。

そうしたエピグラムのうちで、カトゥッルススの詩との関連で注目すべき詩を

(9) Cf. *TLL* s.v. *dico*, 983.11ff., esp. 20ff.

(10) 例えば、カッリマコスのエピグラム集には63作品が含まれているが、そのうち何らかの直接話法や語句の引用を含むのは1, 4, 8, 11, 13, 15, 18, 23, 28, 29, 31, 34, 37, 41, 45, 46, 48, 55, 61の19作品におよび、そのうち詩の最後が直接話法に終わるものは4, 13, 18, 28, 34, 37, 46, 55, 61の9作品、最終行でのごく短い引用が効果的に活かされた作品としては28, 48, 55を挙げることができよう。カトゥッルススでは72.7 *qui potis est, inquis?* (cf. 85.1); 94.2 *hoc est quod dicunt: ipsa olera olla legit* に引用と呼びうる詩句が見出されるし、84.1 *chommoda dicebat*, 2 *et insidias Arrius hinsidias*, 4 *dixerat hinsidias* や 86.3 *totum illud 'formosa' nego* も一種の引用と言えるであろう。なお、*polymetra* の中では第10歌や42歌、45歌などに会話や発話の引用が活かされているほか、第53歌でも末尾の引用が効果的である。エレゲイア詩でも第67歌のように直接話法が活用されている例が見出される。

2つほど見ておきたい。1つ目は

A.Pl. (A) 236 (= HE, Leonidas of Tarentum 83: 2482-5)

Αὐτοῦ ἐφ' αἵμασιαῖσι τὸν ἀγρυπνοῦντα Πρῆπον
 ἔστηεν λαχάνων Δεινομένης φύλακα.
 ἀλλ' ὡς ἐντέταμαι, φῶρ, ἔμβλεπε. “Τοῦτο.” δ' ἐρωτᾷς.
“τῶν ὀλίγων λαχάνων εἶνεκα.” τῶν ὀλίγων.

このエピグラムでは、第1連でプリアーポスの像をデイノメネースなる人物が庭園の番人として建てたことが語られた後、第2連ではそのプリアーポスが語り手として盗人に「我が怒張した姿を見よ」と呼びかけ、続いて盗人の問いかけの言葉を代弁して「それは僅かばかりの野菜のためなのか」という直接話法が引用され、それに対して「僅かばかりのだ」という答えで締め括られている。このように人物の対話から構成されたエピグラムもしばしば見られるが、ここでは行の途中から急に直接話法の引用が始まり、その直後に小辞のδ'と直接話法を導く動詞ἐρωτᾷςが置かれ、それを挟んで引用は次行の半ばまで続いている。これらの特徴には107歌の場合と類似する点がある。とりわけ、引用がいきなり hexameter の行末から始まり、直接話法を導く動詞が最初の言葉の後に来るため、前もって直接話法だという目印がないまま引用が始まり、後になってからそれが直接話法だと分かるような行文の先例として注目される。τοῦτο δ' ἐρωτᾷς という詩句を聞いた段階では τοῦτο が直接話法の引用だとは必ずしも理解されず、次行に至ってそれが了解されるのではないか。次に

A.P. 12.36 (= HE, Asclepiades 46: 1026-9)

Νῦν αἰτεῖς, ὅτε λεπτὸς ὑπὸ κροτάφοισιν ἴουλος
 ἔρπει καὶ μηροῖς ὀξὺς ἔπεστι χνόος·
 εἶτα λέγεις· “Ἦδιον ἐμοὶ τόδε.” καὶ τίς ἂν εἴποι
 κρεῖσσοναὶς ἀχμηρὰς ἀσταχύων καλάμας;

このエピグラムでは、青年期に成長した今頃になって恋人を誘う少年が「僕には今の方が嬉しい」と語る台詞が引用されている。詩人(語り手)は相手の少年にもっと早い段階で応じてもらいたかったらしく、「(髭や太股の)剛毛の方がいいと言う人などいるだろうか」という問いで締め括っている。一見カト

ウッルススの 107 歌とは無関係な詩のようにも見えるが、いくつかの表現の類似性などから、あるいは 107 歌の発想を促した詩である可能性さえ否定できないように思われる。なぜなら、少年の台詞 “Ἡδιον ἐμοὶ τόδε ἢ magis ... (mi) est / optandum と比較の表現や意味内容の点でも類似した要素を含み、また、結びの詩句 καὶ τίς ἂν εἴποι κρείσσονα ... καλάμας; は Catull. 107. 7-8 magis ... dicere quis poterit? と同様の「誰が語れるだろうか」という問いかけであり、「語れる」ことの内容に比較級を含む点でも共通している。そう考えると、冒頭の Νῦν αἰρεῖς という言葉も、少年が青年期の始まりを迎えた「今頃になって誘ってくれた」ということであるなら、思いがけなく詩人の恋に応えてくれたという状況を述べていて、やはり思いがけなくレスビアと仲直りができたカトゥッルススの状況と類似すると言える。なるほど、カトゥッルススはその思いがけない念願成就に欣喜雀躍しているのに対して Asclepiades の詩の語り手はもっと早いほうがよかったといささか不満げである。また、引用された台詞は相手の少年の言葉であり、しかも直前の εἶτα λέγεις によって引用であることが予め明示されており、107 歌の場合のように τίς ἂν εἴποι (= dicere quis poterit?) によって引用が導入されているわけでもない。しかし、これらの類似性、特に直接話法の引用が活かされている点や修辞疑問文で締め括られている点などは、こうした工夫がエピグラムには凝らされる場合があることを示し、カトゥッルススの第 107 歌に見られる同様の仕掛けの先例の一つとして認められるのではないか。

以上のことから考えて、直接話法が時として不意に導入されることは十分あり得ると判断できるだろう。従って、写本伝承を尊重する立場からは、上記の (15) (16) あるいは (15') (16')、中でも最も伝承との相違が小さく、内容的にも比較的単純明快な読みとして、(15) が真正の読みに近いと見るのが穏当な判断なのではないかと思われる⁽¹¹⁾。しかしまた、冒頭の optanti との呼応関係を重視して「事柄・出来事」が「念願すべきこと」であるとする見方からは (16) も無視できない。

(11) 以上の考察を含めた本稿全体を書き終えた後になって、この (15) がすでに Ghiselli によって提案されていた読みであることを見落としていたことに気付いた：A. Ghiselli, ‘Il c. 107 di Catullo’, *Filologia e forme letterarie: Studi offerti a F. Della Corte*, Vol. 2 (Florence, 1988) 339-48(筆者未見、A. J. D’Angour, *CQ* 50 (2000) 616 による)。論述の都合上、当初の議論展開をそのまま保つことをお許し願いたい。

さて、次に上述の (b) の場合、つまり直接話法が hac から始まるという可能性も考慮しておきたい。なぜなら、magis の比較の対象となる hac ... vita ではなく、hac ... in vita と読む場合には、直接話法が magis からではなく、その直後から始まることも考えられるように思われるからである。即ち、

(17) magis “**hac est / optandum in vita**” dicere quis poterit?

「私以上に『この人生には念願すべきことがある』と誰が語れるだろうか？」

この場合にもまた、mi を読み込むとするなら、

(17') magis “**hac mi est / optandum in vita**” dicere quis poterit?

「私以上に『この人生には私にとって念願すべきことがある』と誰が語れるだろうか？」

の可能性もある。これらの場合には、magis は従来のように optandum にかかる比較級ではなく、後続の動詞 dicere ... poterit にかかる副詞として「よりいっそう(強く、正当に)語れる」の意を表す。その比較の対象は、直前の me uno ... felicior に続く文脈から magis = magis me と理解できるであろう。韻律に合わせ伝承読み magis me est は magis = magis me だと説明する注記に由来するものと想定できるかも知れない。

このように読むと、magis から引用が始まるとする場合のように、直前の me uno ... felicior に続くはずの比較級 magis が第三者の発言の中に移動するのではなく、詩人自身による2つの修辞疑問文の中に並列にそれぞれ比較級が含まれることになる。つまり、「誰が私よりも幸福に生きているか」と「誰が私以上に語れるか」という2つの問いかけにより、「詩人ほど幸福な人はない(詩人が最も幸福だ)」「詩人ほどう語れる人はいない(詩人こそが誰にもましてこう語れる)」という趣旨となる。その誰よりも詩人が一番語れることが「この人生には(私にとって)念願すべきことがある」という言葉であるのは、このエピグラムの冒頭からの文脈を考慮するとき、やはり整合的に理解できる言葉だと思われる。なぜなら、詩人は冒頭から「熱望し念願はしていても」「期待はしていない」ことを繰り返し強調していた。強く熱望し念願はしても、その実現に確信は持てなかったのである。しかし、思いがけなくもその念願が実現したことによって、彼は誰にも勝る大きな幸福を感じに至った。その高揚した幸福感を語る締め括りの一節において、詩人が誰よりも強く主張できることが「この人生には念願すべきことがある」という言葉だったとすれば、それはこのエピグラムの冒頭からの展開に合致した締め括りと言えよう。つまり、magis ... dicere quis poterit? という修辞疑問は、かつて念願の実現に確信が持てなかった詩人が、

今や誰よりも強い確信をもって「人生には念願すべきことがある (= 念願は実現しうる)」と語れるに至ったその変化の大きさ・激しさを表現するものとなる。その意味で、この読みもまた、エピグラムの締め括りとして効果的な結末を作り上げる読みと言えるのではないか。

だがこの読みの難点は、先の (15) (16) の場合と違って、構文上明確な切れ目とは言えない magis の直後から新たな文法的構成要素が始まることと、magis ... dicere という hyperbaton を認めなければならない点であろう。しかし、これも必ずしもあり得ないこととは言えない。なぜなら、〔1〕 magis ... dicere はすでに idiomatic な表現として確立していたらしく、その途中で直接話法が引用されるのも詩人による大胆な工夫だったかも知れないからであり、また〔2〕このように直接話法を挟む hyperbaton にも類例が見出されるからである。

〔1〕 magis ... dicere という表現については、*TLL* s.v. magis, 55.64ff. を参照のこと。そこでは、*ferē i.q. rectius, iustius* として、Plaut. Capt. 871 olim si advenissem, magis tu tum istuc diceres; Mil. 1429 [magis <id> dicas, si scias quod ego scio], Pseud. 949 [immo si efficies, tum faxo magis <id> dicas], Cic. Lael. 25 [tum magis id diceres, Fanni, si nuper in hortis Scipionis, cum est de republica disputatum, adfuisses], Sen. contr. 2.6.3 [Convivae certe tui dicunt, ‘vivamus, moriendum est’; hoc nulli magis in domo dicitur quam mihi], Cypr. Epist. 75.24.2 [... ut de nullo alio magis quam de te dicat scriptura divina: ‘homo animosus parat lites, et vir iracundus exaggerat peccata’] を挙げている。最後の例は magis ... dicere が直接話法を伴う例と見ることもできよう。多くの例では si ... などに導かれた条件節の帰結節で「(そういう場合には) もっと正当にそう言える」という表現だが、「誰が私以上に (正当に・強く) こう言えるだろうか」という言い方も可能なはずである。なぜなら、「誰が私より幸福か」に続く「誰が私よりも正当にこう言えるか」という問いは、「誰かもし私より幸福な人がいたなら」その人は「私より正当にそう言えるだろう」、だが「誰かそう言える人がいるだろうか」という繋がりを、いわば縮約した問いだと了解できるからである。即ち、quis me uno vivit felicior? > si quis vivit felicior, magis dicere poterit > quis poterit? という連鎖である。このように、aut magis ... dicere quis poterit? は直前の quis me uno vivit felicior の比較級を受けて語られている点が重要である。つまり、me uno ... felicior に続く aut magis は「誰が私より幸福か」に続いて「あるいは (誰が私) より以上に」という問いを繋げていくが、その直後は直接話法の引用となり、それを挟んだ dicere quis poterit? によって最初の問いとの対応が完成することになる。このように直前の文脈との繋がりで直

接話法が唐突に引用される類似例としては、Hor. Serm. 1.3.11-5 modo reges atque tetrarchas, / omnia magna loquens, modo ‘sit mihi mensa tripes et / concha salis pura toga quae defendere frigus / quamvis crassa, queat.’ を挙げることができよう。この場合には modo ... modo ... の呼応関係が、ちょうど felicior と aut magis の呼応関係に当たる。ただ、こちらではその途中で omnia magna loquens という文言が入ってくることで直接話法の引用が了解しやすくなるとは言えるだろうが、前半との呼応関係を示す modo の直後から急に直接話法が始まる点では類似していると言えよう。

[2] magis ... dicere という hyperbaton が認めうるかという問題だが、これについてはまず、カトゥッルスやホラーティウスには時折、驚くべき語順の dislocation が見られること、それにはヘレニズム詩の先例があることに注意すべきであろう⁽¹²⁾。しかし、この場合には magis と dicere の間にまさに「より正当に語りうる」とされる文言が直接話法で引用される形になるので、上記の Plaut. Capt. 871 magis tu tum istuc diceres で目的語 istuc が間に挟まれているのと結局は同じである。Mil. 1429 magis <id> dicas, Pseud. 949 magis <id> dicas も補正読みを取れば同様であり、Cic. Lael. 25 tum magis id diceres, Fanni, ni ... もそうである。とすれば、むしろ「より正当に語れる」という言い方の magis ... dicere が通常その中間に目的語を置く語順をそのまま活かしつつ、目的語の部分に直接話法を挿入した詩句だと言えるかも知れない。実際に、短いながら直接話法と言える文言が挟まる例も見出される：Plaut. Trin. 537-8 PH. apage a me istum agrum! :: / ST. magis ‘apage’ dicas, si omnia ex me audiveris. なお、直接話法を挟んで副詞と動詞が分離するような構文の例としては、Ov. Fast. 3.475 nunc quoque ‘nulla viro’ clamabo ‘femina credat’; Met. 10.274ff. et timide ‘si, di, dare cuncta potestis, / sit coniunx, opto’ non ausus ‘eburnea virgo’ / dicere Pygmalion ‘similis mea’ dixit ‘eburnae.’ が挙げられよう⁽¹³⁾。この2番目の例のように、直接話法が副詞と動詞の間に長く引用されることで(しかもこの場合には主語も引用の中間に、しかも分詞構文を伴う形で置かれ、重要な文言が引用の最後に回されるという工夫も凝らされることで)効果的な叙述を作り出す場合もあることが分かる。

以上のような例から見て、magis ... dicere の間に直接話法がやや意外性をもって挟み込まれるような詩句をカトゥッルスが工夫したことは十分考え得るので

(12) Cf. Fordyce ad 44.8f., 66.18; Thomson ad 1.9.

(13) Cf. Fast. 6.443 et magna ‘succurrite’ voce / ‘non est auxilium flere,’ Metellus ait.

はないか。あくまでも一つの可能性としてではあるが、上記 (17) (17') のような読みもまた一考に値する点があるように思われる。

* * *

さてしかし、これら (15)(16)(17) などの読みは、上述のように確かに整合的な文脈を作るとは思われるが、「詩人の人生よりも」あるいは「この人生にはよりいっそう」「念願すべきことがある」と誰も語れはしない、あるいは、誰も詩人以上に「この人生には念願すべきことがある」と語れはしない、という結末は、エピグラムの締め括りとして必ずしも最適だとは思えない。それは恐らく、一つには不特定の「より念願すべきことがある」という表現が焦点の定まらぬ漠然とした印象を与えるからであろう。なるほど、漠然たる「念願すべきこと」が問題とされるのは冒頭の *quicquam* という不定代名詞に呼応していて、結末に至って何らか確かに「念願すべきことがある」ということが詩人自身の経験との関わりで改めて問題にされている、と見ることもできよう。しかし、「いったい誰が語れるか (= 誰にもそうは語れない)」という修辞疑問の内容としてやや具体性に乏しく、エピグラムの結末として今ひとつ不明確で的確さや鋭さに欠けるように思われる。また、「人生」と比較する読みでは、直前の「誰が私以上に幸福に生きているか」とは適合するとしても、詩全体との繋がりには弱いように思われる。なぜなら、先にも触れたように、冒頭では「念願」とは「念願する人に何事かが起こる (*quicquam ... optanti optigit*)」ことであつたのに、この結末ではそれが「人生」と比較されるようなものに増幅している点が首尾一貫しない印象を与えるからであろう。むしろ上述のように詩人の幸福感が「人生」全体にまで誇張して語られていて、その高揚感こそが詩の結末で強調されている、という解釈も可能ではあろうが、エピグラムとしての統一性や結末の効果という点からはやはり疑問が残るように思われるのである。

そこで、敢えて写本からは遠ざかるけれども、もう一つ別の角度からの修正の可能性を検討しておきたい。それは、伝承の *hac* は *vita* に引かれて女性形に書き換えられたものであり、本来は *hoc* であつたと想定する読みである⁽¹⁴⁾。この

(14) 例えば省略字体では *hoc* と *hac* はそれぞれ *h* の上に小さな *o* か *a* を記すものだったとすれば (cf. B. Bischoff, *Latin Palaeography*, Cambridge 1990, 159)、前後の文言に影響されるなどして両者が紛れる可能性も少なくなかったと思われる。なお、*hoc* への読み替えにより *hac ... vita* は成り立たないので、8 行目は *optandum in*

場合も *mi* を補う可能性を含めれば、次のような読みが考えられよう。即ち、直接話法の始まりの位置の相違により 3 種類の読みが可能であろう。まずは

(18[18']) "**magis hoc (mi) est / optandum in vita**" dicere quis poterit?

または

(19[19']) **magis "hoc (mi) est / optandum in vita"** dicere quis poterit?

さらには

(20[20']) **magis hoc (me) "est / optandum in vita"** dicere quis poterit?

と読む可能性が考えられる⁽¹⁵⁾。

これらのどれも、それぞれに理解可能な意味をなすと思われるが、結論から言えば、(19) が最も興味深い読みであるように思われる。だが、その含意を検討する前に一応 (18) (20) にも触れておきたい。

まず、(18) (18') のように読む場合には、*hoc* を主格と取るか奪格と取るかによって、『(私には)むしろこのことの方が人生においていっそう念願すべきことだ』と誰が語れるだろうか?』または『(私には)このこと以上に人生において念願すべきことがある』と誰が語れるだろうか?』と二通りに解することが可能であろう。だがいずれにせよ、詩人ほど幸福な人はいない、と言ったあと、詩人を幸福にした経験以上に人生において念願すべき別の事柄を指摘できる人などいないはずだ、という趣旨に理解できる。ただし、前者の解釈では *hoc est* の *hoc* は 2-3 行目で語られた *hoc* ではなく、何らか別の内容をさす言葉となり、その点で同じ *hoc est* の表現が違う対象を示すことであるいはエピグラムとして

vita と読むことになる。

(15) ちなみに、*hoc est* の *hoc* は韻律上長音節に当たる (cf. Catull. 76.15, 83.6, 94.2; *TLL* s.v. *hic*, 2695.70, 2697.18; LHS I 220)。当のこの 107 歌自体においても、2 *insperanti, hoc est*, 3 *quare hoc est* の *hoc* も (また 3 *nobisque hoc* (Statius) と読んだ場合や、さらにおそらく 100.3 *sororem. hoc est* の *hoc* も同様に) やはり長音節であろう。従って、この詩の末尾にもう一度 *hoc est* が同一の韻律で現れることは予め準備されていたとも考えられる。また、カトゥルルスは何度か「つまり、即ち」の意味の用法を含めて *hoc est ...* を多用しているだけでなく (31.11, 42.15, 76.15, 83.6, 94.2, 100.3, 107.2, 3; cf. 68.34 *hoc fit*)、そのうちの 2 箇所においては *hoc est + gerundivum* の構文を用いており (42.15 *sed non est tamen hoc satis putandum*, 76.15 *una salus haec est, hoc est tibi pervincendum*)、詩人にとってなじみの表現だった可能性もある。この詩の構造上も *hoc est* が 2-3 行目の *hoc est gratum* に呼応する形で効果を持つことについては後述するが、特に (19) の読みではこの呼応関係が重要だと考えられるので、その途中で *mi* が介在する可能性は以下では除外して考えることにしたい。

の面白みに繋がると言えるかも知れない⁽¹⁶⁾。つまり、詩人が2度にわたって *hoc est gratum ...* と言ったことに対する反論が、別の人物の口からは別の内容について *hoc est /optandum* という異なる表現で主張されることになる(しかし、詩人自身はそのような人物が現れるはずはないと考えている)というわけだからである。また後者の解釈では、詩人が語った *hoc est gratum ...* と同じ *hoc* を比較の対象として、それ以上に念願すべき別の何事かを語れる人の存在を詩人は否定していることになる。すると結局、詩人は直前で自分こそが最も幸福だ、と言った後、自分の経験以上に「念願すべきこと」などあり得ない、そんな何事かを語れる人などいない、と言っていることになり、文脈上もやはり整合的に理解できる。どちらの解釈を取るにせよ、この読みの利点は先にも見た (15) (16) と同様に、直接話法の引用が *aut* の直後から始まることで、文の区切りと引用の開始時点が一致し、また *magis* と *dicere* の *hyperbaton* を想定せずに済むなど、構文上了解しやすい点であろう。しかしその逆に、*magis* から引用が始まるとすると、直前の *me uno ... felicior* に続く比較の趣旨が詩人自身ではなく第三者の発言の中に移行してしまう点がやはり問題かもしれない。

次に、(20) のように読む場合、*magis hoc* は直前の *me uno ... felicior* に続き、それを受けた *hoc = hoc homine = me* によって「この私以上に」ということを再度強調する表現だと考えられる⁽¹⁷⁾。先にも触れた *magis me est* という韻律に合わない伝承読みはこの場合には *magis hoc* が *magis me* の意味だという注記に由来するものと説明できるかも知れない。しかし、(20') はこの *hoc* にさらに同格の *me* を付加して *magis hoc me*, “*est / ...* と読むものだが、*hoc me* が「この私」の意味となる例はあり得ないとは言えないが極めて稀のようである⁽¹⁸⁾。また、この (20) (20') では行末の *est* から引用が始まると想定するわけだが、そのような例も恐らくあまりないだろう⁽¹⁹⁾。だが他方で、行末の単音節語 *est* が「存在」の意

(16) 上述の *Asclepiades* のエピグラム (AP 12.36 = *HE*, *Asclepiades* 46: 1026-9) での少年の言葉 “*Ἡδίων ἐμοὶ τόδε*” とこの *hoc mi est / optandum* が表現・内容とも類似するのも興味深い。

(17) *hic = ego* については、cf. *TLL* s.v. *hic*, 2703, 40ff. 特に直前に人称代名詞 *ego* (あるいは動詞の一人称) が先行していて *hic* がその一人称を指す場合については、*ibid.* 79ff.

(18) Cf. *ibid.* 67f.

(19) しかし、行末の *est* から新たな詩句が始まる例は見出されるから、あり得ないことではない: *Catull.* 24.7 ‘*quid? non est homo bellus?*’ *inquires. est:/...;* *Hor. Serm.* 2.5.103-4 *est / gaudia prodentem voltum celare;* cf. *Epist.* 1.17.37-8 ‘*esto. / quid? qui*

味を強調しつつ行跨りで引用が続くのは、その表現の大胆さの点ではむしろ効果的だと言えるかも知れない。しかし、この読みでは何らか「念願すべきことがある」という漠然たる発言になるという上述の問題が生じてしまう。

さてそれでは、(19)のように *hoc est / optandum in vita* が直接話法の引用だと見る場合はどうであろうか。この読みで注目すべき点としては、次のようなことが考えられるのではないか。

[1] すでに (17) について見たように、*magis ... dicere quis poterit?* は、冒頭から繰り返し語られたような「熱望し念願はしていても」「期待はしていない」という詩人の自信のなさ、いわばその念願が真に「念願すべきこと」であるとは確信できなかった状況から、思いがけないその実現により、一転して強い確信を得るに至った大きな変化を語る言葉と解される。その詩人が、今や誰よりも確信をもって語れる言葉としては (17) のように何らか「人生には念願すべきことがある」という漠然たる台詞ではなく、むしろ実際の具体的経験を踏まえた「これこそが人生において念願すべきことだ」という言葉の方がふさわしいであろう。つまり詩人は、自分が抱えてきたレスビアとの和解という念願が実現した今、それこそがまさに「念願すべきことだ」と全肯定できる点で誰にも引けを取らない、と言うのである。それは、自分ほど幸せな経験を語る人はいない、と言うに等しい。こうして、「誰よりも語れる人」は「誰よりも幸福な人」の言い換えにほかならないことになる。

[2] 従って、「誰が私以上に幸福に生きているか」と「誰が語れるか」の間の齟齬の問題が解消するのももちろんだが、その2つの修辭疑問文の結びつきも、これまで見てきた (15) (16) (17) (18) などよりもいっそう緊密になる。2つの疑問文は比較級によって最上級を意味する趣旨や、*vivit* に対応する *in vita* 「人生」という契機で結ばれているが、6行目までに語られた思いがけない念願成就が「誰よりも幸福だ」という喜びに繋がったのだから、それに続けてその幸福の源である具体的な経験が言及されるのはむしろ当然である。逆に言えば、誰にもまして詩人が語りうることが何らか「念願すべきこと」であるならば、その念願の対象や比較の対象が、従来の修正提案 (A) や上記の (15) などのように、「このような(幸福な)人生」だというのは、冒頭で言及された「念願していること」とは必ずしも適合しない。なぜなら、詩人は最初からそうした「幸福な生」を

pervenit, fecitne viriliter?'

ではなく、レスビアとの仲直りと再会という一事だけを期待できないと思いつつも熱望し念願していたのであり、幸福な生はその思いがけない結果にすぎないからである。あまりの幸福感ゆえに高揚して、今のこの幸福な人生こそが「最も念願すべきことだ」とまで誇張して言っているのだとすれば、冒頭の *optanti* と最後の *optandum* の対象はかけ離れたものになってしまう。それに対して、まさに本来の念願を指す行末の *hoc est* に始まり行跨りによって「これこそが人生において念願すべきことだ」と強調する台詞の引用は、1 *optanti* および 2-3 *hoc est gratum ...* に呼応して「誰よりも詩人こそが語りうること」としてエピグラムの文脈の展開にぴったりと合致する。

[3] このように、この詩の全体的な構造という面からも、この読みの妥当性を考えることができる。この最後の直接話法の中で *hoc est /optandum in vita* と語られたとすれば、この *hoc* とは明らかに、冒頭で *si quicquam ...* として導入され、2 *hoc est gratum animo proprie* と語られた「思いがけなく実現したある念願」という一般的な事柄に対応し、さらに3行目以下で再び *hoc est gratum ... / quod ...* という形で語られた具体的な詩人の経験、つまり「思いがけなくレスビアが戻ってきた」という事実を指す言葉として明確に了解される言葉である。従って、ここで唐突に何の目印もなく直接話法に切り替わることがこの読みの難点として考えられるのは確かだが、*hoc est ...* が2行目と3行目に繰り返された *hoc est gratum* に続き、明らかにそれに呼応する形で独立した言明の冒頭の言葉として置かれた語句、即ち直接話法の引用の始まりを示すヒントとして機能している可能性が考えられる。先に見たギリシア詞華集のエピグラムでも、直接話法が不意に *τοῦτο* で始まっていたことが想起されよう。こうして、第1連の *si quicquam ... / ... hoc est gratum ...* という不特定なものが、第2連では *hoc est gratum ... / quod ...* という具体的事実に繋がり、それがこの最終連に至って *optanti* と *optandum* の呼応関係を軸に、改めて *hoc est / optandum ...* という形で言及されることで、詩全体のうちに緊密な連関が生まれ、エピグラムとしての一貫性と統一性が作り出されるとともに、詩の結末も具体的で明確な印象を与えることになる。

[4] これをまた少し別の角度から見れば、次のようにも言えるだろう。直接話法が *hoc est ...* で始まっているとすると、*hoc* の内容は「熱望し念願していたが期待はしていなかったことの思いがけない実現」とも理解できる。このエピグラムでは冒頭からその趣旨が繰り返しの表現によって強調されていたのである。その締め括りとして、詩人が今や誰よりも確信をもって「これこそが人生

において「念願すべきことだ」と語れる、と言うとき、その意味するところは、真に「念願すべきこと」とは、言うなれば実現可能性の高い事柄などではなく、むしろ逆に、強く熱望してはいても実現しそうにない念願、期待の持てない願望だ、ということになるであろう。なぜならば、期待の持てない念願こそが、そうであるだけにいっそう、思いがけなく実現したときの喜びと幸福感が大きいからである。つまり、エピグラム全体の趣旨として、冒頭からの文脈の流れを受けて、「これ」即ち「期待の持てない念願の思いがけない実現」こそが人生において真に「念願すべきこと」だという一種逆説的な結論に至っている、という点においても、この読みは詩の締め括りとして機知に富む効果的な詩句となっていると考えられる。

[5] 最後が *dicere quis poterit?* で終わっているのはなぜか。ことさらに「語れる」つまり何かある言明をなすうるか否かがなぜ問題にされるのか。もし(19)のように読むならば、この最後の修辞疑問文はそこに引用される直接話法の言葉を詩人こそが誰よりも強く語りうることを述べているのであるから、結局は詩人自身の言明が引用されているのと同じことになる。従って、その引用句はすでに語られた詩人の2つの言明 *2 hoc est gratum animo proprie*, *3 hoc est gratum* に対応し、それを言い直した言葉であるからこそ、特に最後の修辞疑問文中の引用句の形で強調されているのではないか。レスビアとの思いがけない恋の喜びに満ちた高揚感の中で、詩人が最後に語れるに至った言葉を印象的に表現するために、最後は *dicere quis poterit?* という問いで締め括られているのではないか。とすれば、これもまたエピグラム全体の緊密な統一性を形作りつつ、最後を具体的で確固たる言明を印象的に提示することで作品全体を引き締める役割を担っていると言えるかも知れない⁽²⁰⁾。

以上、Catull.107.7-8の詩句の読みと解釈の問題について検討してきた。従来の修正提案に加えて、新たに想定された読みとしては次のようなものが提示された。

(20) 査読者のお一人から、「念願の実現」が *1 optigit*, *7 vivit*, *8 poterit* と過去、現在、未来の3つの時制で言及されているとの有益な指摘を頂いた。4 *restituis*, 5 *restituis ... refers* などの現在形をも考慮すると、このことはこのエピグラム全体の構造にも関わると考えられる。結末の *poterit* という未来形は(上述の(8) Lyneもその点を重視していたが)、「思いがけない念願の実現」を経験した詩人が2行目の一般論から3行目の個人的感慨を経て、最後の新たな言明を未来にまで妥当する確信として提示していることを示したものと見えよう。

(13[13']) magis hac **re** / optandum [**rem** / optandum] **in** vita **dicere** quis poterit?

(14) magis hac **mi** / optandum vita dicere quis poterit?

(15[15']) “magis hac (**mi**) est / optandum **vita**” dicere quis poterit?

(16[16']) “magis hac (**mi**) est / optandum **in** **vita**” dicere quis poterit?

(17[17']) magis “hac (**mi**) est / optandum **in** **vita**” dicere quis poterit?

(18[18']) “magis hoc (**mi**) est / optandum **in** **vita**” dicere quis poterit?

(19) magis “hoc est / optandum **in** **vita**” dicere quis poterit?

(20[20']) magis hoc (**me**) “est / optandum **in** **vita**” dicere quis poterit?

いずれも、詩全体の一貫性、特に直前の修辞疑問文との整合性に配慮した読みだが、特に (15) 以下は写本伝承が真正の読みを伝えている可能性を前提に直接話法の引用を読み取ろうとするものであった。その中では (15) が最も穏当かと思われるが、エピグラムの締め括りの効果や面白みを考慮した場合には (16) (17)(18)(19) なども考慮に値するであろう。とりわけ (19) は、もちろん magis ... dicere という hyperbaton が容認できると仮定した場合ではあるが、エピグラム全体の緊密な統一性と結末として効果的な締め括りを作り出す読みと言えるように思われる。

(首都大学東京)